



サハリン樺太史研究会 2021 年度活動報告書

2022 年 9 月 9 日
サハリン樺太史研究会

—2021 年度活動報告書—

目次

会長あいさつ

活動概要

例会・関連シンポジウム等

研究成果刊行物（付：参考資料 非会員による研究成果刊行物）

研究プロジェクト（付：参考資料 非会員による研究プロジェクト）

サハリン樺太史研究会会則・役員

報告書刊行について

本会は 2008 年 7 月に発足した。その後、例会開催、共同調査実施を重ね、さらに 2010 年には研究会誌を刊行、2011 年より公式 HP を開設し、研究会内外への発信にも力を入れるようになった。年度活動報告書も 2008 年度分から刊行し、2022 年度活動報告書は 14 冊目の年度活動報告書となる。

2011 年度分以降、参考資料として非会員の研究動向も日本国内限定ではあるものの掲載することとした。このことによって、日本国内のサハリン樺太史研究全体における本会の位置がより明確になろうし、また本報告書によって、完全にまでとはいかないものの、日本国内におけるサハリン樺太史研究の全体的動向を俯瞰することが可能になればと編者として願う。

なお、本報告書記載の情報の一部はインターネット上の情報を参照したものであり、若干の不正確さが残っていることがあり得ることをことわっておく。また、会員については年度末時点で本会のメンバーリストに登録している者を指しており、当時は未会員であった場合もあることはご了承いただきたい。

本報告書の 2017 年度版までに掲載された文献については、下記より検索可能であり、一部ではあるが英文書誌情報や要旨なども閲覧可能である。2018 年度分以降も随時掲載していく予定である。本報告書各年度版と合わせて、サハリン樺太史研究の動向を知るために役立てば幸いである。

サハリン/樺太史研究文献 DB

http://app.cias.kyoto-u.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000311karafutoHIS2

2022 年 9 月 9 日

中山大将

（サハリン樺太史研究会世話人兼公式 Web サイト運営担当者）

—会長あいさつ—

サハリン・樺太は、前近代においては先住民を担い手とした、大陸側から千島列島にいたる海を介した交易ルートの一環であり、近代には日本とロシアの接触地域をなし、両国間で何度も国境線の引き直しと大規模な人口移動が繰り返された特異な歴史を有する島です。

この島の呼称も、幕末までは「北蝦夷地」とよばれ、明治初年から「樺太」とよばれるようになり、全島ロシア領有に変わると「薩哈噠」の3文字が当てられました。日露戦争後の北緯 50 度以南日本領有により、ふたたび「樺太」となり、第二次世界大戦後はサハリンと呼ぶことが一般的となりました。

近年、この島に改めて歴史研究の光を当て、この島の住民が幾世代にも亘って関わった歴史的経験を捉え直そうとする機運が日本、ロシア双方で高まりつつあります。また、日本とロシアとの研究交流は、今世紀に入り、活発に行われるようになりました。たとえば、北海道大学スラブ研究センターとサハリン大学を拠点として、「ロシアの中のアジア／アジアの中のロシア」第 5 回研究会「サハリン・樺太の歴史」(2004 年 7 月 29 日～30 日)、同第 11 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅰ)」(2005 年 9 月 21 日)、同第 13 回研究会「サハリン・樺太史セミナー(Ⅱ)」(2005 年 12 月 3 日)、「日本とロシアの研究者の目から見るサハリン・樺太の歴史」(2005 年 11 月 1 日～2 日、2006 年 2 月 16 日～17 日)、「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」(2008 年 5 月 6 日～7 日)と幾度も研究会が開催されてきました。そして 2008 年の「国際シンポジウム：サハリンの植民の歴史的経験」開催後に、シンポジウム参加者を中心に 2008 年 7 月、サハリン・樺太史研究会が発足しました(初代会長：原暉之北海道大学名誉教授)。

サハリン・樺太史研究会は、これまでの樺太史・サハリン史研究が日本、ロシアにおいて、それぞれ別個に行われてきたことを踏まえ、双方の研究成果を学ぶとともに双方の研究成果の交流、資料保存情報の交流などの研究交流を進め、「一国史」ととらわれないサハリン・樺太史を描くことを目標としています。

本会は札幌を拠点として研究会、シンポジウムを定期的に(年間 5 回程度)開催しております。これら研究会、シンポジウムは参加自由で、どなたでも参加できます。サハリン・樺太史の研究に関心をお持ちの方は、本会事務局にお知らせいただけましたら、案内メールを差し上げます。

2013 年 12 月 17 日

サハリン樺太史研究会会長 白木沢旭児(北海道大学大学院文学研究科教授)

—活動概要—

新型コロナウイルス感染拡大からの復帰

新型コロナウイルスの感染拡大の影響はとどまらないものの、今年度は全面オンライン方式で第 59 回例会の開催を実現した。第 59 回例会の内容は、2019 年度末に開催を予定していたものの新型コロナウイルス感染拡大の影響で延期としていた湯山英子会員と兎内勇津流会員の研究報告であり、オンラインという形にはなったものの、ようやく本会も新型コロナウイルス感染拡大下での例会の定期的開催の兆しが見え始めてきた。

加藤絢子『帝国法制秩序と樺太先住民』刊行

加藤絢子会員が 2022 年 3 月に『帝国法制秩序と樺太先住民: 植民地法における「日本国民」の定義』(九州大学出版会)を刊行した。同書は、2019 年に九州大学に提出した博士論文『帝国法制秩序と樺太先住民: 植民地法の制定・運用・判例への総合的分析』が基となっている。樺太先住民族の法的地位などまで詳細に論じる歴史研究書として重要な意義を持つ一書である。

外国語の研究・史料の翻訳

天野尚樹会員がサハリンの研究者ディン・ユリアの論文「21 世紀のサハリン朝鮮人: 適応過程の完了」(宋恵媛と共訳)を、兎内勇津流会員と醍醐龍馬会員が共同でヴラジスラフ・ラトウシシェフ、ガリーナ・ドゥダレツ「1869 年から 1870 年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会」の翻訳を行ない学術誌上で発表した。

シベリア出兵とサハリンに関する研究会・シンポジウム

兎内勇津流会員と醍醐龍馬会員がそれぞれ代表を務める研究プロジェクトの共催で 2021 年 8 月 23 日に開かれた第 9 回シベリア出兵史研究会で北サハリンに関する報告が 2 件なされたほか、近現代東北アジア地域史研究会でも北サハリンに関する研究報告が 3 件なされた。

ソ連占領初期南サハリン史料勉強会

兎内勇津流会員が主催するソ連占領初期のソ連公文書の勉強会は、引き続き活動を続けている。

訃報 今西一元・副会長逝去

2022 年 1 月 6 日、本会の副会長を務められた今西一会員が亡くなった。今西会員は、本会発足当初より牽引役として重要な役割を担ってこられた。本会会長名義の追悼文とサハリン樺太史関連業績は、以下の特別ページで公開している(<http://sakhalinkarafutohistory.com/imanishi.html>)。

(2021 年度末会員数: 122 名)

—例会・関連シンポジウム等—

■ 第 59 回例会

日時:2022 年 03 月 05 日

場所:zoom によるオンライン方式

報告 第二次世界大戦後ベトナムからの「引揚げ」と「残留」……………湯山英子(北海道大学)

報告 イヴァン・クヴァチ(1908?1978)の写真に見る南サハリン、1946 年 10 月……………兔内勇津流(北海道大学)

—研究成果刊行物—

(五十音順)

■東俊佑 近世史

【定期刊行物】

東俊佑「松浦武四郎『近世蝦夷人物誌』とカラフトアイヌ」『北海道博物館研究紀要』7号、2022年3月。
[https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/wp-content/uploads/2022/04/bulletin_HM_vol7_02_p009_036.pdf]

■天野尚樹 ロシア極東近現代史・北東アジア国際関係史

【定期刊行物】

ディン ユリア(天野尚樹、宋恵媛共訳)「21世紀のサハリン朝鮮人:適応過程の完了」『山形大学歴史・地理・人類学論集』23号、2022年3月10日。[<http://id.nii.ac.jp/1348/00004211/>]

【論文集】

天野尚樹「島を規律する:境界をめぐる地政治」岩下明裕編著『北東アジアの地政治:米中日ロのパワーゲームを超えて』北海道大学出版会、2021年11月25日。

■池田裕子 教育史

【定期刊行物】

池田裕子「樺太のマイノリティはどうか」『歴史評論』857号、2021年9月1日。

■井澗裕 建築・都市史

【論文集】

井澗裕「四つの門と六つの要塞:海峡をめぐる日本とロシア」岩下明裕編著『北東アジアの地政治:米中日ロのパワーゲームを超えて』北海道大学出版会、2021年11月25日。

■板橋政樹 サハリン史

【定期刊行物】

板橋政樹「1905年7月、サハリン島ヴラディミロフカ占領戦にともなう義勇兵・住民の虐殺:「山本大尉作業」の分析を中心に(上)」『北海道東北史研究』12号、2021年9月30日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 小山内道子 来日ロシア人史

【定期刊行物】

小山内道子「ニコライ・ヴィシネフスキー著 小山内道子(訳) 白木沢旭児(解説)『樺太における日ソ戦争の終結 知取協定』を翻訳して」『ポストーク』45号、2021年4月。

■ 梶浦篤 アイヌモシリ・琉球・奄美研究

【定期刊行物】

梶浦篤「日露平和条約交渉の視角と死角：『引分け』とは『北方四島÷2』ではない」(連載1・2)『e-論壇 議論百出 GFJ』(2021年7月7・8日)

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4518>]

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4519>]

梶浦篤「日露平和条約交渉の視角と死角：法律・歴史・経済・信頼・時間」(連載1・2)『e-論壇 議論百出 GFJ』(2021年7月7・8日)

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4520>]

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4522>]

梶浦篤「日露平和条約交渉の視角と死角：北方領土問題とソ連崩壊」(連載1・2)『e-論壇 議論百出 GFJ』(2021年7月7・8日)

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4521>]

[<http://www.gfj.jp/cgi/m-bbs/index.php?no=4523>]

■ 木村由美 日本近現代史

【定期刊行物】

木村由美「海を渡って来たもの」『北海道史への扉』3号、2022年3月。

[https://www3.library.pref.hokkaido.jp/digitallibrary/ics/view_data?dataId=0328811&libno=14]

■ 加藤絢子 先住民族史

【著書】

加藤絢子『帝国法制秩序と樺太先住民：植民地法における「日本国民」の定義』九州大学出版会、2022年3月31日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■白木澤涼子…………… 政治史

【定期刊行物】

白木澤涼子「北海道・樺太・沖縄県の地方制度から明治地方自治体制の「自治」を考察する:「会」、法人格、議決、地方費をめぐって」『地域経済経営ネットワーク研究センター年報』11号、2022年3月30日。[<http://hdl.handle.net/2115/84873>]

■菅原慶郎…………… 経済史

【定期刊行物】

菅原慶郎「岡田八十次による小樽を通じたサハリン島の漁場経営」『月刊小樽學』150号、2021年9月10日。

■鈴木仁…………… 文化史

【定期刊行物】

鈴木仁「資料で語る北海道の歴史 樺太における郷土研究と文化事業について」『北海道史研究協議会会報』109号、2021年12月25日。

鈴木仁「日本領時代の樺太におけるキリスト教の形成」『キリスト教史学』75号、2021年7月25日。

■須藤浩司…………… 近代北方史

【定期刊行物】

須藤浩司「1925(大正14)年皇太子裕仁の樺太巡啓について」『北海道東北史研究』12号、2021年9月30日。

■醍醐龍馬…………… 外交史

【定期刊行物】

醍醐龍馬「黒田清隆の樺太放棄運動:日露国境問題をめぐる国内対立」『年報政治』第2021巻1号、2021年6月。

ラトウイシェフ ヴラジスラフ、ドゥダレツ ガリーナ(醍醐龍馬、兎内勇津流訳)「1869年から1870年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会」『小樽商科大学人文研究』143号、2022年3月18日。[<http://hdl.handle.net/10252/00006116>]

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 兎内勇津流……………ロシア史

【定期刊行物】

ラトウィシェフ ヴラジスラフ、ドゥダレツ ガリーナ(醍醐龍馬、兎内勇津流共訳)「1869年から1870年までのサハリンとアムール地方における侍従武官長イヴァン・スコルコフの委員会」『小樽商科大学人文研究』143号、2022年3月18日。[<http://hdl.handle.net/10252/00006116>]

■ 中村和之……………北東アジア史

【論文集】

中村和之「モンゴル帝国と北の海の世界」櫻井智美、飯山知保、森田憲司、渡辺健哉編著『アジア遊学 256 元朝の歴史:モンゴル帝国期の東ユーラシア』勉誠出版、2021年6月。

【定期刊行物】

中村和之「アイヌの北方交易と蝦夷錦という中国製の絹織物」『東国史学』70号、2021年4月。
[https://researchmap.jp/Ezo_nishiki3/published_papers/32578482]

中村和之「13、14世紀のアムール河下流域の寒冷化についての事例提供」『函館大学論究』第53巻1号、2021年10月。[<http://doi.org/10.18896/00000365>]

■ 中山大将……………移民社会史

【論文集】

나카야마 다이쇼 (약자: 정 계항) 「경계 변동에 따른 전승 국민의 본의 아닌 귀국: 제2차 세계대전 후의 주민 이동 중 남사할린 중화민국인을 중심으로」부경대 인문한국플러스사업단 편『동북아해역과 귀환: 공간, 경계, 정체성』소명출판、2021年9月10日。

中山大将「樺太旧住民の戦後市民運動: 戦災・引揚げ・抑留・残留・帰国」外村大編著『和解学叢書4 市民運動 和解をめぐる市民運動の取り組み: その意義と課題』明石書店、2022年3月25日。

【定期刊行物】

中山大将、巫靚「日本領樺太移民社会の医療と衛生問題」『日本領樺太移民社会の医療と衛生問題』34号、2022年3月19日。[<http://id.nii.ac.jp/1690/00000011/>]

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■パイチャゼ スヴェトラナ 教育学

【論文集】

藤野陽平、パイチャゼ・スヴェトラナ「帝国が残した国立博物館と戦後の社会」上水流久彦編著『アジア遊学266 大日本帝国期の建築物が語る近代史:過去・現在・未来』勉誠出版、2022年2月10日。

■松山紘章 社会史

【定期刊行物】

松山紘章「『群馬県庁文書』の樺太移住手続関係史料」『歴史民俗資料学研究』27号、2022年3月。
松山紘章「1920年代から1930年代の日本植民地「樺太」の国境:西海岸安別を中心に」『北海道東北史研究』12号、2021年9月30日。

■山田祥子 言語学・民族学

【定期刊行物】

山田祥子「北海道立北方民族博物館が所蔵する池上二良氏の調査・研究ノート(引照付きリスト)」『北海道立北方民族博物館研究紀要』31号、2022年3月25日。
[https://doi.org/10.34330/hoppohmbulletin.31.0_085]

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

■ 参考資料 非会員による研究成果刊行物

- 【著書】石井図書製作編『樺太へ奥地へ』石井図書製作、2021 年 9 月。
- 【定期刊行物】岩崎守男「樺太での生活経験と全国樺太連盟の活動について：北海道近現代史研究会・第 7 回学習会」『北海道自治研究』638 号、2022 年 3 月。
- 【定期刊行物】榎森進「カラフト島仮規則」調印前後における幕府の「北蝦夷地」政策を巡って」『東北文化研究所紀要』53 号、2021 年 12 月。
- 【定期刊行物】梶原洋「サハリン発見「アイヌ鑑」の年代について」『東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館年報』12 号、2021 年 6 月 23 日。[<http://id.nii.ac.jp/1330/00000791/>]
- 【論文集】北原次郎太「樺太アイヌ語」小野智香子編『日本語の隣人たち I+II』白水社、2021 年 11 月。
- 【著書】北原モコットウナシ編『和田文治郎・和田完収集樺太先住民族民具資料目録』北海道大学アイヌ・先住民研究センター、2022 年 3 月。
- 【定期刊行物】阪口諒「アイヌ語樺太方言における数詞と計算」『北方人文研究』15 号、2022 年 3 月 25 日。[<http://hdl.handle.net/2115/84608>]
- 【定期刊行物】阪口諒「樺太アイヌのトゥイタハ：B. ピウスツキによる英訳テキスト」『千葉大学人文公共学研究論集』43 号、2021 年 9 月 30 日。
[<https://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900119890/>]
- 【定期刊行物】佐々木周一、小柳貢「特集 サハリンを含む極東観光の草分け=杉山基さんを偲ぶ「寄せ書き」」『ポストーク』46 号、2021 年 7 月。
- 【定期刊行物】柴田善雅「管理通貨制移行後の樺太石炭会社の事業拡張と衰退」『東洋研究』221 号、2021 年 11 月。
- 【論文集】柴田幹夫「「福井日記」に見る大谷光瑞の樺太行きについて」野世英水、加藤斗規編著『近代東アジアと日本文化』銀河書籍、2021 年 7 月。
- 【定期刊行物】高木崇世芝「岡本文平の樺太周回とその作成図」『北海道史研究協議会会報』108 号、2021 年 6 月 30 日。
- 【定期刊行物】高橋英樹、東隆行「菅原繁蔵の『樺太植物図誌』と『樺太植物誌』」『植物研究雑誌』第 96 巻 3 号、2021 年 6 月。
- 【定期刊行物】高橋英樹「菅原繁蔵『樺太植物誌』(1975)の植物図について」『北方山草』39 号、2022 年 3 月 29 日。
- 【著書】谷内尚文『樺太風物抄(アジア学叢書 352 復刻)』大空出版社、2021 年 12 月。
- 【論文集】谷古宇尚「サハリン美術の形成：ジョージア出身のキヴィ・マントカヴァについて」北海道大学芸術学研究室編集『アートと、そのあわいで：北村清彦教授北大退職記念論集』中西出版、2021 年 5 月。
- 【論文集】丹菊逸治「ニヴフ語」小野智香子編『日本語の隣人たち I+II』白水社、2021 年 11 月。
- 【定期刊行物】辻原万規彦、角哲「昭和 17 年の火災以前の樺太庁本庁庁舎と火災後に計画された新庁舎」『日本建築学会計画系論文集』第 86 巻 785 号、2021 年 7 月 30 日。

*【著書】…著書、編書、翻訳書など。【論文集】…定期刊行物以外の文献に掲載された論文など。【定期刊行物】…学術誌、紀要、会誌などに掲載された論文など。

- 【論文集】辻原万規彦「帝国日本の南北に建設された製糖工場と社宅街」上水流久彦編著『アジア遊学 266 大日本帝国期の建築物が語る近代史：過去・現在・未来』勉誠出版、2022 年 2 月 10 日。
- 【定期刊行物】中村和恵「北川アイ子さんの生活の記録 北海道で暮らすサハリンの先住民ウイルトアの文化伝承」報告記』『いすみあ 明治大学大学院教養デザイン研究科紀要』13 号、2022 年 3 月。
- 【論文集】パールィシェフ・エドワルド「近代的な北東アジアの形成とロシアン・フロンティア：1920 年のニコラエフスク事件とサハリン州保障占領」李曉東、李正吉編著『論集北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響』明石書店、2022 年 3 月 31 日。
- 【論文集】平井健文「樺太期の「産業」の遺構は何を伝えるのか」上水流久彦編著『アジア遊学 266 大日本帝国期の建築物が語る近代史：過去・現在・未来』勉誠出版、2022 年 2 月 10 日。
- 【著書】藤谷崇文館編『全国市町村便覧：三府四十三県北海道台湾樺太朝鮮関東州南洋 附全国学校名簿 昭和十年初版（復刻版）』信山社、2021 年 8 月。
- 【著書】藤沼敏子『WWII50 人の奇跡の命：満蒙開拓青少年義勇軍・従軍看護婦・軍人・サハリン残留・沖縄・台湾・満州からの早期帰国者』津成書院、2021 年 7 月。
- 【定期刊行物】宮川達二「小熊秀雄の樺太」『詩と思想』第 3 巻 407 号、2021 年 7 月。
- 【著書】百瀬響編『北海道・東北と樺太におけるアイヌ・和人間の北方交易圏に関する実態研究 Vol.2』北海道教育大学札幌校、2022 年 3 月。
- 【論文集】ニコラス・ランブレクト「終わりなき旅の物語としての引揚げ文学：李恢成の初期作品における「引揚性」をめぐって」蘭信三ほか編『帝国のはざまを生きる：交錯する国境、人の移動、アイデンティティ』みずき書林、2022 年 3 月 31 日。
- 【定期刊行物】Antonenko Viktoriia「Between Prestige and Pragmatism : Soviet Customs Relations with Japanese Concessions in Sakhalin in the 1920s-1930s」『北方人文研究』15 号、2022 年 3 月 25 日。
[<http://hdl.handle.net/2115/84599>]
- 【著書】『昭和前期商工信用録 第 2 期第 8 巻 昭和 10 年(4)』クロスカルチャー出版、2022 年 1 月。

—研究プロジェクト—

(代表者五十音順)

■小川正人 先住民族史

[継続]小川正人(北海道博物館)「近代日本におけるアイヌ民族の〈社会への参画〉の歴史に関する基礎的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2023 年度。

■加藤絢子 先住民族史

[継続]加藤絢子(九州大学)「帝国臣民になることの意味：漁業権と日本国籍付与をめぐる樺太先住民族の政治的活動」科学研究費補助金・若手研究、2020-2023 年度。

■加藤聖文 日本近代史

[最終]加藤聖文(国文学研究資料館)「日ソ戦争アーカイブズ構築に関する日露共同研究」国際共同研究加速基金・国際共同研究強化(B)、2018-2021 年度。

■醍醐龍馬 外交史

[最終]醍醐龍馬(小樽商科大学)「近代国際関係における雑居地樺太：国境未画定の時代」科学研究費補助金・若手研究、2019-2021 年度。

[単年]醍醐龍馬(小樽商科大学)「樺太(サハリン)に関する学際的研究：国境変動により何が起きるのか」北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」共同研究、2021 年度。

■竹野学 日本経済史

[新規]竹野学(北海商科大学)「移住植民地樺太の工業化と都市形成に関する研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2021-2023 年度。

■宍内勇津流 ロシア史

[継続]宍内勇津流(北海道大学)「シベリア出兵と東アジア国際環境の変動」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2022 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

■ 中村和之 北東アジア史

[継続]中村和之(函館工業高等専門学校)「サハリンアイヌの交易と文化変容、その学際的研究」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2020-2023 年度年度。

■ パイチャゼ・スヴェトラナ 教育学

[[継続]パイチャゼ スヴェトラナ(北海道大学)「韓国の安山市におけるサハリン帰国者のホスト社会への適応問題: 若い世代を中心に」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2022 年度。

■ 玄武岩 メディア学

[最終]玄武岩(北海道大学)「引き揚げと帰国のはざま: 1950~1970 年代における日本への帰還」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2021 年度。

■ 藤本健太郎 外交史

[最終]藤本健太郎(東北大学)「戦前期サハリン島をめぐる国際関係史」科学研究費補助金・特別研究員奨励費、2019-2021 年度。

■ 参考資料 非会員による研究プロジェクト

[新規]浅倉有子(上越教育大学)「モノ資料からみる近代アイヌ社会と文化研究課題」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2021-2023 年度。

[継続]李英美(一橋大学)「戦後日本の出入国管理政策と東アジア地域における「国籍」問題に関する歴史的考察」科学研究費補助金・研究活動スタート支援、2020-2021 年度。

[最終]太田満(奈良教育大学)「移民学習論の再検討:「残留日本人学習」の教材開発を通して」科学研究費補助金・若手研究、2018-2021 年度。

[継続]小口雅史(法政大学)「古代末期防衛的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2022 年度。

[最終]阪口諒(千葉大学)「アイヌ語樺太方言における動詞の数表示体系に関する研究: 言語類型論の観点から」特別研究員奨励費、2020-2021 年度。

[継続]佐藤丈寛(金沢大学)「古代ゲノム解析による東アジア: シベリア境界領域における人類集団の変遷の解明」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2023 年度。

[最終]佐藤正則(山野美容芸術短期大学)「サハリン在留日本人とその家族の越境のライフストーリー」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2019-2021 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

[継続]鈴木琢也(北海道博物館)「北方交易の展開にともなう擦文文化集団の拡散についての考古学的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2023 年度。

[継続]澤田和彦(埼玉大学)「近代日露交流史の諸問題に関する実証的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2024 年度。

[最終]日比嘉高(名古屋大学)「帝国日本の書物流通ネットワークと知の文化基盤に関する調査および総合的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2019-2021 年度。

[新規]福田正宏(東京大学)「日露共同調査によるサハリン新石器時代社会形成過程の解明」科学研究費補助金・国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))、2021-2025 年度。

[最終]百瀬響(北海道教育大学)「北海道・東北と樺太におけるアイヌ・和人間の北方交易圏の実態研究」科学研究費補助金・基盤研究(B)、2019-2021 年度。

[継続]吉田さち(跡見学園女子大学)「在日コリアンおよび在樺コリアンにおける言語接触・方言接触に関する社会言語学的研究」科学研究費補助金・基盤研究(C)、2020-2024 年度。

[新規]BAEK SANGYUB(室蘭工業大学)「サハリンエウエンキ語の記述:サハリンにおける言語接触とその歴史的変遷の解明」科学研究費補助金・若手研究、2021-2025 年度。

* 掲載している研究プロジェクトは、本会関係者が代表者をつとめるもののうち、サハリン樺太史関連のもののほか、周辺地域・領域をテーマにする物も含んでいる。[新規]…今年度より開始したもの。[継続]…中間年度にあたるもの。[最終]…最終年度にあたるもの。[単年]…今年度開始した単年度のもの。

サハリン・樺太史研究会会則

2015 年 6 月 21 日改正

2011 年 5 月 28 日改正

2009 年 5 月 16 日採択

1. 本研究会はサハリン・樺太史研究会と称する。
2. 本研究会は、サハリン・樺太を対象地域とし、主として歴史分野に関する研究の促進と研究者の交流を目的とする。
3. 本研究会は、その目的を達成するために次の事業をおこなう。
 - (1) 定例研究会(例会)・シンポジウムなどの開催。
 - (2) 共同の研究・調査、およびその成果の公開。
 - (3) サハリンの大学・研究機関との交流、情報交換および共同研究の促進。
 - (4) その他本研究会の目的を達成するために適当な事業。
4. 本研究会は、サハリン・樺太の歴史に関心があり、その目的に賛同し、事業に協力する個人の会員からなる。
5. 新年度最初の例会時に総会を開催する。総会は本研究会の最高議決機関であり、総会の議決は原則として出席会員の過半数によって成立する。
6. 本研究会には次の役員をおく。

世話人(若干名)・会長(1名)・副会長(1名)・事務局長(1名)。
7. 世話人は総会で選出し、世話人の互選により会長・副会長・事務局長を選出する。
8. 会長は本研究会を代表し、会務を統括する。
9. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。
10. 本研究会に事務局をおく。事務局長は会長・副会長のもとで本研究会の事務全般を担当する。
11. 役員任期は2年とする。ただし再任はさまたげない。
12. 本会則は2015年6月から発効する。本会則の改正は役員議を経たのち総会の議決による。

サハリン・樺太史研究会役員(2020年度末現在)

2015年6月21日選出

2016年8月26日追加選出(*)

2017年7月22日追加選出(**)

2019年6月29日追加選出(***)

会長：白木沢旭児

副会長：天野尚樹

事務局長：鈴木仁

世話人：池田裕子(**)、井潤裕、醍醐龍馬(***)、竹野学、兔内勇津流(*)、中山大将(*)

=====
サハリン樺太史研究会 2021 年度活動報告書

発行日：2022 年 9 月 9 日

編集者：中山大将

発行者：サハリン樺太史研究会

【公式 HP】 <http://sakhalinkarafutohistory.com/home.html>
お問い合わせは、上記 HP の問い合わせフォームよりお願いいたします。

=====